

小論文 解答例

問一 「生命の尊厳」とは、生命は神聖なものであり絶対に尊重しなければならない価値を持つということである。医療者はこの立場から患者の生命維持と健康回復を目指す、その結果延命を優先し患者の意志や人生観を犠牲にすることもありうる。対して、患者自身の自己決定権に基づき人生や生活における質を重視した医療が必要だという「生命の質」という概念が生まれ、この二つの概念は補完・対立し合う現代の医療思想となっている。（百九十八字）

問二 私は、「生命の尊厳」と「生命の質」は両方とも医療者にとって必要な考え方であるが、特に「生命の質」を重視するべきだと考える。なぜなら、患者がどのような治療や生き方を選ぶかは患者自身の判断が最も大切であるし、その判断の基準は「生命の質」であるからだ。

本文に述べられているように、医療者が治療に際して、患者の生命を尊重して、その生命を長く維持させたり健康を回復させたりするのは当然の判断基準であろう。しかし、「生命の尊厳」のみを重視して患者にとっての「生活の質」や「人生の質」などの「生命の質」を無視しては、延命のための治療は「無残な状態」になりかねず患者のためになる医療とはいえなくなる。特に、患者の死が避けられない場合、「生命の質」が重視されていくだろう。様々な医療技術の発達によって今まで不治といわれた病気も治療法が確立されてきた。しかし、どうしても治らない病気、死が避けられない病気が存在する。そのような病気を持つ患者に対しての治療や、治療中の生活では患者の「生命の質」が重視される。例えば、終末期のがん患者が、苦しい治療を避けて痛みや緩和を中心にした治療を自ら選ぶのであれば、直接生命を長引かせることにならないかもしれないが、残り少ない時間を自分のやりたいことに費やしたり、自宅で家族と空間を共にして生活したりするのは、患者の「生活の質」を高めることになる。また回復が見込めなくても、家族と共に一日でも長く生きたいという患者の望みによって選んだ治療法であれば、苦しいものかもしれないがそれは患者の人生を延ばすことになり患者の「人生の質」を維持したことになる。

筆者が述べているように、「生命の尊厳」と「生命の質」という概念はどちらかだけを採用しなければならぬ、というものではないが、以上から私は患者自身の判断や希望を尊重した、「生命の質」を重視した医療が必要だと考える。（七百八十七字）

小論文 解答例

問一 人工知能を医療に関わせた場合、人間の価値観とは異なる判断により人間の安全・安心を脅かす心配が指摘されるため、設計段階で偏見のない価値観を学習させることが求められる。また、人工知能を医療上の判断に関与させた際、使う側と作った側の責任を分けて考える必要がある。臨床研究を重ね安全性と有効性が認められれば、医療用具の一つという位置付けで、人間が責任を負う上で人工知能を用いることは可能だろう。（百九十四字）

問二 私は、人工知能を今後医療で積極的に用いるべきだと考える。なぜなら人工知能は進化の途上にある科学技術の一つであり、それを医療に用いることで現在よりもさらに多くの患者の幸福を追求することが期待できるからだ。

人工知能の発達は確かに目覚ましく、画像を認識したり情報を処理したりする能力は人間が及ぶことができない。人間が行っている仕事が奪われる心配はもつともである。しかし、人工知能が人間の作業をどれほど代行しても、人間の仕事はなくなることはない。例えば、患者の病気の状態を画像から読み取る作業を考えると、人工知能は人間よりはるかに多くの画像を短時間に読み取れるだろう。さらにいろいろな症例を照らし合わせて複数の治療法をもれなく提案することもできるだろう。データの読み取りは人工知能に任せて、それを深く分析し、新たな治療法を考え出したり試したりする仕事に人間を回すことができる。そのようにして、今まで人間の力だけでは物理的にできなかった大量の作業がこなされ、それによる診察や医療行為が人間によって可能になるのは、望ましいことだ。

科学技術は、決して最初からすべてが安全であつたわけではない。しかし、人間は科学技術の安全性を一つ一つ確かめながら、人間の生活を向上させてきた。これは医療の世界でも当てはまる。確かに、科学技術は人間が用いるものであり、科学技術にすべてを託すことは危険である。本文に述べられているように、人工知能は医療の現場で医師の判断を補助する道具であることを決して忘れず、それをいかに失敗なく使うか、また使用によって得られた結果や分析をいかに正確に判断するかは人間の力量に任されており、そのための努力を医療者は怠ってはならないだろう。

以上から、人工知能を医療に積極的に用いるべきだと考える。（七百四十六字）